

プラトン『国家』における三つの比喩と善の探求

— 506D8—E4 の解釈 —

The Three Similes and the Search for the Good in Plato's *Republic*: An Interpretation of 506D8-E4

金山 弥平

I. 《善とは何か》と《善の子ども》

すべての人は自分に善いものが具わることを欲する。その事実を『国家』第6巻505Dでソクラテスは次のように表明する。「諸々の正しいことや美しいことであれば、多くの人々は、それが実際に正しかったり美しかったりしなくても、そう思われる物事を行なったり、所有したり、そう思われたりすることを選ぶであろう。しかし善い物事の場合は、そう思われるものを獲得することで満足する人はもはやだれ一人おらず、人々は、事実善い物事を求め、この領域ではすべての人が思いなしを軽んじる。」

あらゆる人々が求める善が、いったい何であるか、ということ — 善の実相（アイデア） — は、最大の学ぶべき事柄である（505A）。実際、国家が完全な秩序を保つためには、それを監督する守護者は、《善とは何か》ということ、また、いかなる点で正しいことや美しいことは善いものであるか、ということを知らねばならず、そしてそれを知らないうちは、正しい事柄や美しい事柄を十分に知っているとは言えない（505D11—506A7）。しかし、この「すべての魂が追い求め、そのためにすべてのことを行なう」（505D11—E1）ところの善は、同時に「何かそこに有るはずだと魂が本能的に感じながらも、いったいそれが何であるのか困惑して把握できず、そして、他の物事の場合のように確固たる信念をもつこともできず、それゆえ他の物事までも、たとえそこに何らかの益があったとしても取り逃がしてしまうもの」でもある（505E1—4）。

『国家』においてソクラテスは、この最大の学ぶべき事柄の説明を求められ、

「善の子ども」を紹介して要求に答える。善の子どもとは太陽のことである(508B12-13)。太陽をとおしての類比的な説明は、続く二つの比喩でも継続して行なわれる(cf. 509D1-3, 517A8-C6)。このことは、太陽の比喩、線分の比喩、洞窟の比喩の三つが相互に補完しあって善の子どもによる説明を構成していることを示唆する。

ところがこれらの比喩を読むとき、我々が感じるのはまさに「何かそこに有るはずだと魂が本能的に感じながらも、いったいそれが何であるのか困惑して把握できず、そして、他の物事の場合のように確固たる信念をもつこともできず、それゆえ他の物事までも、たとえそこに何らかの益があったとしても取り逃がしてしまう」という先の引用とおりの戸惑いである。すなわち三つの比喩は、善のアイデアが認識諸対象に対してもつ力、善のアイデアへの探求者の接近について鮮烈なイメージは与えはするが、しかしそれによって、我々が善について何か知見を増し加えることになったか、と自問するなら、我々は(あるいは少なくとも私は)残念ながら「否」と答えざるをえないのである。例えば国家の守護者も、三つの比喩を聞か読むかすることで、「いかなる点で正しいことや美しいことが善いものであるか」(506A4-5)という彼らに必要とされる認識を獲得しうるのであろうか。ある行為がいかなる点で F であるかを説明しうるためには、(ソクラテスが常々主張してやまなかったように) F とは何かを知ることが必要とされる。「いかなる点で正しいことや美しいことが善いものであるか」を知るために必要なのは、《善とは何か》の知識である。はたして三つの比喩は、この《善とは何か》の知見に導くような説明であるのだろうか。あるいは、プラトンはこれら三つの比喩を、それを示された人たちが、《善とは何か》の認識に少しでも近づきうるようなものとして意図していたのであろうか。

この問題の考察において興味深いのが、太陽の比喩を説明する直前のソクラテスの言葉である(506D8-E4; 便宜上、番号を付けておく)。

(1) さしあたり、善がそれ自体として何であるかということはわきへ除けておくことにしよう。(2) というのも、今の時点で、ともかく私に思われていることに到達することは、現在の・手許にあるホルメー⁽¹⁾を越えた大きなことであると私には思われるからである。(3) しかし、何が善の子どもとして、そして善に最もよく似たものとして現われているか、ということは語りたいと思う。

この言葉からソクラテスが示そうとしているのが、《善とは何か》ということではなく、善の子ども、あるいは善に最もよく似たものとして彼に現われているものであることは確かである。しかし、(a)《善とは何か》を示さず、(b)善の子どもを示すとはどういうことであろうか。ソクラテスの言葉の一つの可能な解釈は、(a)《善とは何か》を自分は知っていない以上、知識は披瀝できないが、しかし(b)善に関する思いなしであれば語ることができるから、それを伝えよう、というものである。この解釈は次の二点から支持されるように思われる。(i)《何であるか》を示しうことは、しばしば知識の指標とみなされる。(ii) 506Cでソクラテスは、自分は《善とは何か》を知っておらず、知っていないものについて知っているかのように語るの正しいこととは思えない、と言うが、それに対してアデイモントスは、知っているかのように語ることは正しくないが、しかし、思っていることを思っていることとして語ることは許されるはずだ、と述べる。もしもソクラテスがアデイモントスの言葉を聞き入れたとすれば、彼は善に関する思いなしを、思いなしにすぎないという但し書きつきで述べていることになる。

しかし、この解釈に対しては次の反論が提出されるかもしれない。第一にソクラテスは、アデイモントスの要求に対する答弁のなかで、知識を欠いた思いなしというのは、すべて恥ずべきもの・醜いものであると言う。彼によれば、真実を思いなす人の場合も、その人は知識を欠いている以上、盲人が正しく道を進んでいる場合と何ら異なるところはない(506C6-9)。このように述べるソクラテスが、知識を欠いた自らの思いなしを(たとえ思いなしにすぎないという限定つきでも)あえて口にするであろうか。第二に、《善とは何か》という問題をわきへ除けておく理由として、上述の引用(2)で、ソクラテスは、「私に思われていることに到達することは、現在の・手許にあるホルメーを越えた大きなことであると私には思われるから」と述べる。この発言は、ソクラテスがたんに知識の披瀝だけでなく、《善とは何か》について「私に思われていること」、すなわち彼の思いなしの提示も行なうつもりがないことを示唆する。

しかし、この第二の論拠は、引用(1) - (3)の関係は次のようにも解しうるため、そのまま認めるわけにはいかない — (1')《善とは何か》ということの知識の披瀝はさしひかえよう。(2')というのも、思いなしを示すことだけでも、手許にあるホルメーによるかぎり、私にはなしえないことであるから。(3')そこで、私はこれから別のホルメーを採用し、私の思いなしを善

の子どもを示すという形で披瀝しよう。すなわち、(2)で「私に思われていることに到達することは、現在の・手許にあるホルメーではなしえない」と述べたあと、(3)において善の子どもについて語り始めるとき、ソクラテスは、現在のホルメーを維持しつつ、目的を「私に思われていることへの到達」という困難な課題から、別のより簡単な課題に変えたのではなく、むしろ（これまで用いてきて今また）手許にあるホルメーに変えて別のホルメーを採用し、「私に思われていることへの到達」という課題に向かっていったとも解しうるのである。

もしも(3)においてソクラテスが自分の思いなしを示すことを約束しているのであれば、三つの比喩は、たとえ《善とは何か》の知識を含んでいなくても、少なくともプラトンが真なる思いなしとみなしうるもの、彼の見解は含んでいることになる。確かに、(3)で言われているとおり、比喩をとおして示されるのは、《善とは何か》の説明ではなく、むしろ善の子どもの説明ではある。しかし、善の子ども説明をとおしてプラトンが解明しようとしているもの、その説明のターゲットは、あくまでも《善とは何か》であると考えられる。そうであるなら、我々は三つの比喩のうちに、《善とは何か》という問題に関するプラトンの見解を読みとるべく、積極的に努力すべきである、ということにもなるだろう。

このような試みは、別の理由からも支持されるように思われる。(1)においてソクラテスは、善がそれ自体として何であるかということは、「さしあたり」わきへ除けておくと言う。「さしあたり」という語句は、「今ここでは」《善とは何か》の探求を行なわないが、しかし、まったく行なわないわけではなく、「いつか将来」行なうであろう、ということを示唆するように思われる。もしもここでプラトンが、《善とは何か》の将来の説明を約束しているのであれば、当然それは、プラトンの対話篇のうちに求めるべきであろう。しかしプラトンの現存する対話篇を見るかぎり、《善とは何か》の探求は、『国家』のこの箇所以外には認められないように思われる⁽²⁾。この事実を我々はどう考えるべきだろうか。プラトンは他の対話篇でそれを行なうつもりでいながら、けっきょく断念せざるをえなかったのか、つまり、プラトンは約束しながら、それを果たすことができなかったのだろうか。プラトンに約束不履行を帰することを望まない立場からは、プラトンが、その約束を『国家』の三つの比喩をとおして果たしていると考えられることも可能であろう。とくに先の段落で述べたように、善の子ども説明も《善とは何か》の説明とみなしうるのであれば、けっきょ

く『国家』のこの箇所を、《善とは何か》という問題に関するプラトンの *locus classicus* とみなすべきであるのかも知れない⁽³⁾。

しかし、このように考えることには次の問題がある。確かにこれにより、プラトンは約束不履行の罪は免れるであろう。しかし、それと引き換えに、プラトンは虚言を弄していたことになる。なぜなら、「さしあたり」《善とは何か》はわきへ除けておく、と言いながら、実際にはわきへ除けていないことになるからである。プラトンに約束不履行も、虚言も帰することのない道がなお残されているのであろうか。一つの道は、『国家』のもっと後の部分に、あるいは、『国家』以外の対話篇のうちに、《善とは何か》の展開を見出そうと模索することであろう。そのような解釈の試みは、例えば『ピレボス』について、確かに行なわれているところではある。しかし、それが成功しているとはみなしがたい⁽⁴⁾。

我々には、もはやいかなる道も残されていないのであろうか。一般的に言って、我々がだれかを約束不履行で訴える場合、訴えられた相手が約束を果たさなかったというよりは、むしろ訴える我々が、実際には約束されていないものを、約束と誤解しているということが時として起こる。今の場合も、引用(1)のうちにプラトンによる《善とは何か》の説明の約束の暗示を読み取る点で、ひょっとして我々の方が間違っているのかも知れない。

以下において我々は、(1)に関わるこの問題も視野に入れつつ、(1) – (3)において、またとくに(2)において、ソクラテスは何を言おうとしたのか、太陽の比喩に始まる三つの比喩を述べることでプラトンは何を意図したのか、プラトンが提示すると約束したかのように見える《善とは何か》の説明は、はたして三つの比喩か、『国家』の別の箇所か、あるいは『国家』以外の対話篇で与えられているのか、といった問題を考察することにする。

II. 506E1–3

先に試訳として、「というのも、今の時点で (τὰ νῦν)、ともかく私に思われていること (τοῦ γε δοκοῦντος ἐμοί) に到達する (ἐφικέσθαι) ことは、現在の・手許にあるホルメー (τὴν παρούσαν ὀρίμην) を越えた大きなことであると私には思われる (μοι φαίνεται) からである」と訳した 506E1–3 のテキストは次のとおりである。

πλέον γάρ μοι φαίνεται ἢ κατὰ τὴν παροῦσαν ὁρμὴν ἐφικέσθαι τοῦ γε
δοκοῦντος ἐμοί τὰ νῦν.

Burnet のテキストにしてわずか三行のこの一文について、我々はいくつかの問題を提起することができる⁽⁵⁾。

- (a) 「私に思われていること」(τοῦ . . . δοκοῦντος ἐμοί) を我々は、《善とは何か》に関するソクラテスの思いなしと考えたが、この想定は正しいか。
- (b) 「今の時点で」(τὰ νῦν)は何に懸かっているのか。
- (c) 「到達する」(ἐφικέσθαι) とはどういう意味であり、その主語となるのはだれであるか。
- (d) 「私には思われる」(μοι φαίνεται)の主語は何か。
- (e) 「現在の・手許にあるホルメー」(τὴν παροῦσαν ὁρμὴν)とはどういう意味か。
- (f) 上記テキストのように述べた後で善の子どもを説明しはじめるとき、ソクラテスは「現在のホルメー」を維持しつつ、「彼に思われていることへの到達」より 1 ランク下の課題を遂行しようとしたのか、それとも課題のランクは下げず、「手許にあるホルメー」に変えて別のホルメーを採用し、困難な課題に向かったのか。

a. 「私に思われていること」

これまでの議論において我々は、「私に思われていること」(τοῦ . . . δοκοῦντος ἐμοί) は、《善とは何か》に関するソクラテスの思いなしであるという前提のもとに議論を行ってきたが、この前提は正しいのだろうか。τοῦ . . . δοκοῦντος ἐμοί を「ここまで到達するのがよいと私に思われる地点」の意味で解することも可能かもしれない⁽⁶⁾。その場合はソクラテスは、《善とは何か》という問題について、ここまで到達するのがよいと彼が判断した地点に到達することは、現在の・手許にあるホルメーのままでは困難であるから、善の子どもへと議論を移す、と言っていることになる。

しかし、この解釈は前後の文脈からして支持されない。506 の議論は次のように進行している。

- (i) アデイマントスが善に関するソクラテス自身の意見を尋ねる (506B2-4)。
- (ii) この要求を受けてソクラテスは、アデイマントスは「他の人々に思われていること」(τὸ τοῖς ἄλλοις δοκοῦν, B6)では満足しないのだと述べる (B5-7)。
- (iii) ソクラテスが用いた「他の人々に思われていること」という語句を、アデイマントスは「他の人々のドグマ (見解・意見)」(τὰ τῶν ἄλλων . . . δόγματα, B8-9) と言い換え、ソクラテスに対して「ソクラテス自身のドグマ」(τὸ . . . αὐτοῦ, B9)を語るよう求める(B8-C1)。
- (iv) ソクラテスは、知識を欠いた思いなし (τὰς ἄνευ ἐπιστήμης δόξας, C6) はすべて、恥すべきもの・醜いものであると言う (C2-D1)。

この議論の流れの延長線上で、「私に思われていること」(τοῦ . . . δοκοῦντος ἐμοί, E2)という表現をソクラテスが用いるとき、「私に思われていること」は、「他の人々に思われていること」、「他の人々のドグマ」と対比された「ソクラテス自身のドグマ」を意味すると解されるべきであろう。ところが「他の人々のドグマ」とは、他ならぬ《善とは何か》という問題に関する彼らの見解である。したがって、ソクラテスの「私に思われていること」も、《善とは何か》という問題に関する彼の見解・思いなしとみなされるべきである。

b. 「今の時点で」

「今の時点で」(τὰ νῦν, 506E3)は何に懸かるのであろうか。この語が懸かる可能性としては、(i) 「(私に) 思われている」(δοκοῦντος, E2)、(ii) 「到達する」(ἐφικέσθαι, E2)、(iii) 「(大きなことであると私には) 思われる」(φαίνεται, E1)の三つがある。このうち、(iii)には、「今の時点で」から最も遠く離れているという困難に加えて、目の前の課題が他の時点ではなく、とくに「今の時点で」大きく思われると強調することにどのような意味があるのか不明である、という難点がある。では、(i)と(ii) ではどちらが選ばれるべきであるか。これら2つの可能性を挙げながら、けっきょく(ii)の方を選ぶ Adam は、その理由を次のように述べる⁽⁷⁾ — ‘τὰ νῦν should be taken with ἐφικέσθαι. If we take it with δοκοῦντος, we must suppose that Socrates intends to suggest that his view of the matter may change . . . He is hardly likely to have made such a suggestion, even

ironically.’

しかし、この Adam の主張は正しいのだろうか。本当に《善とは何か》という問題に関するソクラテスの見解が変化してはいけないのか、と我々は尋ねてみなければならないであろう。ソクラテスは、自分は《善とは何か》ということの知識をもっていないと言う。このことは、《善とは何か》について彼が探求途上にあること、すなわち、善の知識に向けて接近していくという意味において、彼の見解が変化しうることを意味する。もちろんソクラテスにおいては、以前に正しいと考えていたことが間違っていると思われるようになる、という意味では、意見を変えることはないかもしれない。しかしともかく、「到達する」(ἐπικέσθαι, E2)という語が示唆するような、善の知識に向かう過程での到達点の変化という意味では、不屈の探求者ソクラテスが抱く「私に思われていること」は、確実に変わっていくのである。それゆえ Adam の主張にもかかわらず、むしろ τὰ νῦν は δοκοῦντος と結びつけられるべきである。実際それが、τὰ νῦν を一番近い語句と結びつけて読む、という意味で、最も自然な読み方なのである⁽⁸⁾。

c. 「到達する」

ところで、ソクラテスが《善とは何か》を探求し、何らかの見解を「私に思われていること」としてすでに獲得しているとしたら、彼はすでにその見解にまで到達しているはずである。どうして(2)において「私に思われていることに到達する」ことが困難なこととして語られているのであろうか。我々は、「到達する」(ἐπικέσθαι)とはどういう意味であり、その主語となるのはだれであるのか、という問題の考察に向かわねばならない。

「到達する」のは、ソクラテスであるか、あるいはアデイマントスら対話相手であるかのいずれかである。もしもソクラテスであれば、彼に思われていることはすでに彼の到達点であるから、いまさら到達する必要はないように思われる。もちろん「到達する」をたんに「抱くようになる」の意味ではなく、「確認する」の意味で理解し、ソクラテスはすでに《善とは何か》についてある種の見解を抱いているが、しかし、まだその正しさを確認するにはいたっておらず、それゆえ「自分に思われるところに到達する(自分がそう思っていることを自ら確認する)」必要がある、と解釈する可能性もある。しかし我々は、《善とは何か》についての見解を抱いているのが、他ならぬソクラテスであるという事実を忘れてはならない。無知の知に徹しつつけたソクラテスが、自ら確認

することなく何らかの見解を抱く、ということがはたしてありうるだろうか。あるいは、プラトンがソクラテスを、未確認の見解を抱く人として描くことがありうるだろうか。ソクラテスが何にせよ見解を抱くのが、徹底的吟味とそれに基づく確認を経た上のことであるなら、少なくとも彼に関するかぎり、再度の確認の必要はまったくないのである。

「抱くようになる」という意味でも「確認する」という意味でもなく、「知識として物にする」という意味で「到達する」を解する可能性については、どうであろうか。つまりソクラテスは、「《善とは何か》」について自ら確認し、ある種の見解をもってはいるが、しかし、それを知識にまで高めることは、いまだなしえておらず、その作業を今この時点で行なう余裕はない」と言っていると解するのである。しかしこれに対しては、ソクラテス自身による知識獲得に向けての善の探求が 506 の文脈で問題となりうるか、という疑問が生じる。アデイアントスたちが今この場面で求めているのは、善に関するソクラテスの見解・思いなしの説明である。その説明を断る理由として、知識への到達の作業はここではあまりにも大きな課題であるから、と述べることは、ソクラテスが知識にまでいたっていないことを承知の上で、思いなしを思いなしとして語ればよいと主張するアデイアントスにとっては、拒絶の理由として受け入れられないものであるだろう。

かくして我々は次のように考えるべきである — 「到達する」のはソクラテスではなく、ソクラテスの説明を聞くアデイアントスたちであって、(2) の主張は、「《善とは何か》」についてソクラテスが抱いている見解・地点にまで、彼の説明を聞く人たちが到達することは、現在の・手許にあるホルメーを越えた大きなことである」という意味で解されるべきである。

しかし、ここで次の疑問が浮かぶ。ソクラテスは《善とは何か》という点について、ある種の認識を得ているはずである。だとすれば、聴衆はその説明を聞きさえすれば、ソクラテスの見解にまで到達できるのではないか？ この疑問に答えるためには、「現在の・手許にあるホルメー」という問題(e)の検討が必要になるであろう。しかしその前に、問題(d)に対して、我々の回答を与えておくことにしよう。

d. 「私には思われる」

「私には思われる」(μοι φαίνεται)の主語は何であろうか。我々が試みに示した先の翻訳では、「私には思われる」の主語を「私に思われていること(τοῦ

γε δοκοῦντος ἐμοί) に到達する (ἐφικέσθαι) こと」と解した。しかし、(1) から、「善がそれ自体として何であるか」(αὐτὸ . . . τί ποτ' ἐστὶ τἀγαθόν, D8-E1) という問題を、「私には思われる」の主語として補うことも可能である。この場合は、(2) は、「《善とは何か》という問題は、私に今思われることにまで到達すること — 現在の・手許にあるホルメーによって到達すること — よりも困難な問題であると私には思われる」という意味で解されることになる⁽⁹⁾。しかし、この解釈は次の問題を抱えている。「私に今思われること」(τοῦ . . . δοκοῦντος ἐμοὶ τὰ νῦν, E2) は、すでに見たように、「善とは何か」についての、他の人々の見解 (τὸ τοῖς ἄλλοις δοκοῦν, B6) と対比されるソクラテス自身の見解であった。それゆえ、「私に今思われることにまで到達すること」はそれ自体、「善とは何か」という問題の探求過程に組み込まれる事柄である。したがって、今の解釈に従って (2) を解するなら、(2) はけっきょく、「《善とは何か》という問題は、. . . 《善とは何か》の探求のなかで私がたどり着いた見解にまで到達すること以上に困難な問題である . . .」という、まったく意味をなさない主張になってしまうのである。

それゆえ (2) は、あくまでも「《善とは何か》についてソクラテスが現時点で抱えている見解にまで、アデイマントスたちが到達することは、現在の・手許にあるホルメーではなしえない大きな事柄であると、ソクラテスには思われる」という意味で解されるべきである。では「現在の・手許にあるホルメー」とはいったい何なのであろうか。これがけっきょく、(2) の意味するところ、および、「善とは何か」の探求における三つの比喩の位置づけを解明するための鍵になるように思われる。

III. 「より長い道」と「現在の・手許にあるホルメー」

e. 「現在の・手許にあるホルメー」

「ホルメー」(ὁρμή, 506E2) について、Adam は ‘The idea is as of a start or impulse which enables one to clear the obstacles in the way; cf. 451C’ と言い、あたかも ‘start’ と ‘impulse’ が同じことを意味しているかのように語る⁽¹⁰⁾。しかし、これらは同じことを意味しているのだろうか⁽¹¹⁾。我々が何ごとかをスタートするとき、重要な契機となるのは ‘impulse’ あるいは ‘thrust’⁽¹²⁾ だけではない。それと同様に、あるいはそれ以上に、進み行く方向・道が重要である。出発した後、

‘impulse’あるいは‘thrust’はひよっとして衰えるかもしれない。しかし、方向・道は、出発時と同じ運動・進路を続けているかぎり一般に変わることはない。

「現在の・手許にあるホルメー」と呼ばれているものも、‘impulse’や‘thrust’よりはむしろ、最初に採択された方向・道なのかもしれない。事実、Adam が参照し、彼自身は‘impulse’の訳語を当てる『国家』451C の ὁρμήを⁽¹³⁾、ほとんどの訳者たちは方向・道の線で訳しているのである⁽¹⁴⁾。実際、451Cの「ホルメー」は、守護者たらんとする者たちをいわば羊の番犬のように考えるという議論の方針(451C8; cf. 375D-E)である。

「現在の・手許にあるホルメー」(506E2)は‘impulse’であるか、それとも「方針・道」であるかという問題を考える際の手がかりになると思われるのは、506D8-E4の直前のグラウコンの言葉である。知識を欠いた思いなしは恥ずべきものであるというソクラテスの言葉を受けて、グラウコンは次のように言う。

ソクラテスよ、終わりにまで来てしまったかのように引き下がらないでください。というのも、正義や節制やその他の徳について語ってくださったような仕方、善についても語ってくだされば、それで我々は満足するでしょうから(506D2-5)。

正義や節制やその他の徳についてソクラテスが語ってきた仕方とは、どのような仕方なのだろうか。504B-505Aによれば、第一にそれは、徳のそれぞれをはっきりと見てとる(κατιδεῖν, 504B2)ための「より長い道」と対比される道である。第二に、506Dのグラウコンの「満足」(ἀρκέσει, 506D3)という語が示しているように、探求対象に関する確実な認識にいたることはできないが、アデイマントス等、ソクラテスの問答相手にとっては満足感を与える道である(cf. ἐξαρκεῖν, 504B4; ἀρεσκόντως, B6; ἰκανῶς, 504C3)。しかしそれは、第一の「より長い道」と比較するなら、厳密さを欠いた道(504B5-6)、怠け者の道であって(ῥαθυμία, 504C5)、そこから生まれるものは不完全であり、尺度(μέτρον, 504C3)とはなりえず、守護者となるべき者が採用すべき道ではない(504C6-D1)。なぜなら、より長い道を進み行くのでなければ、学ぶべき最大のものである善の実相(cf. 505A2)を厳密、明確に観取することはできないからである(504D2-3, cf. ἀκριβέστατα καὶ καθαρῶτατα . . . τὰς ἀκριβείας, 504E1-3)。さらにこの厳密さを欠いた道は、完全な仕上げ

(τελεωτάτην ἀπεργασίαν, 504D7) をなおざりにしたものであり、下図(ύπογραφή, 504D6) にすぎないとも語られる。

より長い道と、不完全ではあるが、ソクラテスの問答相手が満足を感じる道の対比は、504B でソクラテスが回顧的に言及する 435D において、すでに行なわれていたところである。ソクラテスはその箇所、正義、節制、勇気、知恵が何であるかという問題⁽¹⁵⁾の厳密な把握は(ἀκριβῶς... λάβωμεν, 435D1-2)、今用いているような方法に基づいては(ἐκ τοιούτων μεθόδων, D1)不可能であって、目的に導く、より長い道がそれとは別にあると語っていた。このことは、他ならぬ容易な方法によって導き出された 441D-442D の正義、節制、勇気、知恵の定義は、確かにそれぞれの何であるか(ὁ ἕκαστον εἶη, 504A6)を表わしてはいるが、しかしなお厳密性を欠いた下図にすぎず、尺度とはなりえないことを意味する。

「尺度となりえない」とは、どういう意味であろうか。504C6-D1 では、厳密性を欠いた道は、守護者となるべき者がとるべき道ではないと語られ、そして 506A4-7 では、守護者は、例えば善について、いかなる点で正しいことや美しいことが善いものであるかを知らねばならない、と言われている。また 501B では、国を支配する者の課題として、自然本来的に正しいもの、美しいもの、節制あるものに目を向けつつ、国家を作り上げていくことに言及されている。これらの記述は、「尺度となりえない」とは、「いかなる点で、ある行為・制度がFであるか(Fは何らかの徳を表わす性質)を判断する尺度となりえない」を意味することを示唆する。実際、441D-442D に示された正義等の定義を聞くことによって、いかなる点でそれぞれの行為・制度が正義等の性質を具えているか、だれにせよ判定できるようになるとは考えがたい。たとえそこで示された定義が、『国家』篇の当面の目的に即して、対話相手を満足させ、さらにソクラテスもそれに大いに満足しているとしても(cf. 435D6-8)、しかしそれは、尺度として現実の行動に役立つ厳密な知識のレベルからは、程遠いのである。

厳密な知識に導くのは、ソクラテスが 435D で言及し、また 504B でも繰り返し触れる「より長い道」である。これは、守護者となるべき者がとらねばならない道である(τὴν μακροτέραν... περιπέτον τῶν τοιούτων, 504C9-D1)。ところで守護者となるべき者は、具体的にはどのような道を進まねばならないのであろうか。519C8-D1 では、守護者となるべき者には、洞窟の比喩において描写された道、すなわち、魂を向けかえ、険しい坂道を登り、善を観得す

るにいたる道が課せられねばならない、と述べられる。このことは、けっきょく「より長い道」とは、洞窟の坂道を登り、善のアイデアを直接見るにいたるまでの、探求の長く厳しい道であることを示唆する。ソクラテスが語るとおり、この困難な道程をとおして善の実相を捉えるまでは、「だれも正しい事柄や美しい事柄を十分に知ることはないだろうと推測される」(506A6-7)のである。

以上我々は、506Dにおけるグラウコンの発言を糸口として、より長い道と、グラウコンが求める厳密性を欠いた道に関するソクラテスの見解を見てきたのであるが、確認された事柄をもとに、もう一度506D-Eに立ち帰り、「現在の・手許にあるホルメー」の解釈を試みてみよう。グラウコンは、厳密性を欠いた道を通っても、正義、節制等についての一応の定義にいたりえたことに触れ、同様の仕方でも善についても定義し、善とは何かを説明してほしいと、ソクラテスに求める——彼にとってはそれで満足なのである(506D2-5)。ソクラテスは、もしもそれができれば、正義等の場合と同様、自分自身大いに満足であろう、とは述べる(D6)。しかし、善は正義等とは異なる。後者については、厳密な意味で知っているわけではないにしても、一応その定義を提出することはできた。もちろん定義と言っても、それに依拠することによって正義の行為をなすことができるような定義ではない。むしろそれは、より長い道をとおしての完全な仕上げを必要とする下図にすぎないものであった(cf. 504D6-8)。しかし善については、下図すら描くことができないように思われる(506D7-8)。それゆえソクラテスは、《善とは何か》ということはさしあたりわきへ除けておいておこうと言う(D8-E1)。なぜなら、善に関するソクラテスの現時点での見解にまで、アデイモントスたちが到達することは、これまで彼らが正義などを定義するために用いてきた方針(παροῦσαν ὁμήν)をもってしてはどうしても不可能な、大きなことであると思われるからである(E1-3)。それゆえソクラテスは、《善とは何か》の代わりに善の子どもを説明するのである(E3-4)。

ソクラテスが《善とは何か》をさしあたりわきへ除けておくのは、彼に‘impulse’や‘thrust’が欠如しているからではない。熱意とか、衝動とか、欲求であれば、ソクラテスには有り余るほどある——実際、ありすぎて醜態を演じ、笑い者になるのではと、ソクラテス自身恐れるほどである(506D7-8)。παροῦσαν ὁμήνとは、ソクラテスや仲間たちがもっている‘impulse’ではなく、これまで正義等について用いてきた方針・道なのである。435D1-2ではその方針について、「今我々が言論のうちで用いているような方法から」(ἐκ

τοιούτων μεθόδων, οίαις νῦν ἐν τοῖς λόγοις χρώμεθα) という表現が用いられていた。「(・ ・ ・) から」(ἐκ)という表現は、言及された方法が出発点とされていたことを示す。‘start’を意味する「ホルメー」を用いて、506E2で「手許にあるホルメーに即して」(κατὰ τὴν παρούσαν ὀρμήν)と言うとき、ソクラテスは435Dで出発点とされた方法のことを考えているのである。

506D7-8のソクラテスの発言は、次のように解される。

《善とは何か》については、正義等の場合に描いたような下図さえも、描くことはできないように思われる(506D7-8)。したがって、これまで正義等について用いてきた方針・道では、この問題に関する自分の見解にアデイモントスたちが到達することはできない(E1-3)。だから《善とは何か》ということは、さしあたりわきへ除けておこう(D8-E1)。

しかしなぜ、善については、正義の場合のような下図を描くことができないのであろうか。例えば正義であれば、国家においては、それぞれの種族が自分に相応しいことを行なうときにその国家は正しい国家である、という形で、また個人においては、魂の各部分がそれぞれの部分に相応しいことを行なうときにその人は正しい人であり、自分に相応しいことを行なう人である、という形で下図が示されていた(441D8-E2, cf. 443D-444A)。その下図は、益になるもの、つまり善きものは、正義であるか、それとも不正であるかを判定するために用意された下図であった(367B-369B, 444E-445A)。そしてこれに基づいて、魂の調和を形成する正義こそが、益になるもの、善きものであり、魂の混乱を生む不正は、害をなすもの、悪しきものであるとの判定が一応下されたのである(445A-B)。

ここで興味深いのは、「正義は善きものである、不正は悪しきものである」と判定を下すにあたって、主語の位置に来ている「正義、不正」については下図を描く必要があったのに、述語の位置に来ている「善、悪」については下図を描かなくても、判定を下しえたことである。「正義」については、「強い者の利益」(338C, 341A, 344C, 347C)、「何であれ支配者の定めることを被支配者が行なうこと」(339C)、「強者が自分の利益になると思うことを、弱者が行なうこと」(340B)、「被支配者の利益」(342E-343A)等々、『国家』第1巻の段階では、一定の定義に達することができなかった。それゆえソクラテスは第1巻の最後で次のように言う——正義が何であるかを私が知っていないときは、

私は、それが何らかの徳であるか、あるいはそうでないか、正義をもっている人が幸福でないか、幸福であるかについては、ほとんど知ることはないであろう (354C1-3)。『国家』では、正義の人が幸福であることを示すために、正義の定義が下図として与えられた。他方、善は、「すべての魂が、何かそこに有るはずだと本能的に感じて追い求め、そのためにすべてのことを行なうところのもの」(505D11-E1) であり、下図がなくても、少なくとも 445A-B の判定を下しうるための理解は、一応、すべての人が有しているのである。

しかし、445A-B で下された判断は、最終的な判定ではない。正義が実際にそのとおり善きものであることをはっきり見てとることは、まだ課題として残され、その試みを放棄してはならないと、ソクラテスは判定の直後に述べる (445B5-7, cf. 504D6-8)。ここにおいて『国家』の議論は、もはや下図も、「すべての魂が・・・本能的に感じている」事柄も役に立たない領域に踏み込んでいる。それは、最大の厳密性を必要とする最大の事柄 (504E2-3)、それなしでは他のすべてのものが無益になり、それを知らなければ他のすべての知識が無益になる事柄 (505A)、つまり《善とは何か》という問題に、議論が突入したからである。そしてまさにそれゆえ、ソクラテスは 506E2-3 において、この問題に関する自分の現在の見解にまでアデイマントスたちが到達することは、下図作成に役立つこれまでの道ではなしえない大きな課題であると思われる、と語るのである。

つまり、《善とは何か》をさしあたりわきへ除けておこう、とソクラテスが述べるのは、《善とは何か》を探究しないでおこうという意味ではない。それは最大の課題であり、厳密な方法による探究を必要としている。むしろ、グラウコンが、正義、節制等の定義が簡単に得られたことを思い起こし、同様の方法を適用して、善も説明してほしいと語る (506D2-5) のに対して、ソクラテスは、先の場合のような仕方、《善とは何か》をすぐ目の前の短期的な目標として設定するのは止めにしよう — この目標はさしあたりわきへ除けておこう、と言っているのである。したがってまた、「わきへ除けておこう」というソクラテスの言葉を、「《善とは何か》の知識の披瀝は差し控えよう」という意味で解する冒頭で触れたような解釈も、受け入れることはできない。

IV. 三つの比喩の役割

f. 新たなホルメー（道）

かくして、問題(f) — プラトンは、三つの比喩を述べることで、*παρούσαν ὁρμή* を維持しつつ、「ソクラテスに思われていることへの到達」とは別の課題を遂行しようとしているのか、それとも、問題の「到達」にいたるために *παρούσαν ὁρμή* に変えて別の *ὁρμή* を採用しているのか — の答えも明らかである。善という最大の課題を避けて通るわけにはいかず、そしてこの課題については、*παρούσαν ὁρμή*（これまで正義等について用いられた道）で済ますことはできず、別の新たな道が必要とされる。その道が、善の子どもによる説明、三つの比喩なのである。

しかし、次の疑問が浮かんでくるかもしれない。《善とは何か》に関するソクラテスの見解にまで到達することが、今までの方法ではなしえないほどの大きな課題であるとした場合、はたしてその課題を、三つの比喩により、善の子どもにすぎないものを示すことによって達成しうるのであろうか。むしろソクラテスは（あるいは、ソクラテスに語らせるプラトンは）、《善とは何か》の説明を完全に諦めてしまい、三つの比喩による類比的説明をとおして、善のアイデアに関して何らかの示唆を与えることに、自らの課題を限定したのではないだろうか。

この問いに対して我々は次のように答えることができる。三つの比喩を聞く者が、まさにその比喩を聞くことによって、《善とは何か》に関するソクラテスの見解にまで到達しうるかいなかは、その人が比喩の内に込められたメッセージをどう受け取るかに懸かっている。そしてまた、どう受け取るかは、「ソクラテスの見解に到達する」という課題を、他の人ではない、自分自身に与えられた探求の課題として受け取るかいなかに懸かっている。ソクラテスは、三つの比喩の説明の最後で次のように言っているのである（518B6-D1）。

これら〔洞窟の比喩等の説明〕が真実であるなら、・・・次のように考えなければならない。教育というのは、・・・魂のうちには知識がないとして、そこに知識を入れるようなもの〔ではない〕。・・・今の言論が示しているところによれば、魂のうちに内在する各人のかの能力と、それによって各人が学ぶ器官とを、・・・生成する事物の方に向かっている状態から、魂全体とともに向けかえ、存在するもの、および存在するものの中で最も明るいものを見て、それに耐えることができるようにしなければならない。そしてこの最も明るいものが善である

と、我々は言うのである。

もしも人が、ソクラテスの見解に到達することを他人事としてではなく、ソクラテスから与えられた課題として受け取るのであれば、彼あるいは彼女は、このソクラテスの言葉を自分に向かって発せられた言葉として受け止めなければならない。そして、ソクラテスの言うことが「真実である」(518B6-7)と思うなら、「今の言論が示しているところ」(C4)に従い、自分の「魂のうちに知識がないとして、そこに知識を入れ[てもらう]」(B8-C1)のではなく——そもそもソクラテスは、B8-C1で言及される他の教師たちと異なり、自分の知見を対話相手の魂のうちに外から植えつけようとはしない——、「魂のうちに内在する・・・かの能力を、・・・魂全体とともに向けかえ、存在するもののうちで最も明るいもの[善]を見て、それに耐えることができるようにしなければならない」(C4-C10)。守護者となるべき者が、三つの比喩の説明をとおして示された「より長くて険しい道」を、自ら進みゆくよう求められているように(cf. 519C-D)、《善とは何か》について学ぶことを希求するソクラテスの友(そのうちにプラトンは、自分自身も数えるであろう)は、三つの比喩を示されることにより、「より長い道」を進むよう強く促されているのである。

ここから次のことが言える。ソクラテスは比喩を語ることによって、《善とは何か》に関する彼の思いなしを述べているのではない。思いなしは先にも見たように、恥ずべきもの・醜いもの(αἰσχραί, 506C7)であり、たとえ真なる思いなしであっても、盲人が正しく道を進む場合と何ら異なるところはない(506C6-9)。もちろんソクラテスも知識をもっていない以上、彼自身、所持しているのは、知識を欠いた真実の思いなしにすぎず、その点で正しく道を進む盲人と何ら異なるところはない。いやむしろ人間だれしも、探求の過程においては手探りで苦勞し、つまずきながら進むのである。しかし、そのこと自体には、いささかも恥ずべき点・醜い点はない。それはまさしく、515E-516Aで描写される人の姿、つまずき喘ぎながら洞窟を登り、輝きで目がいっぱいになって何も見ることはできないが、しかしなお手探りで何とか探求の道を進もうとする人の姿が、けっして醜くはないようなものである。『国家』篇に登場するソクラテス自身、この世に降りればその目は暗闇に満たされ、法廷では笑い者にならざるをえないだろうし(516E-517A, D-E)、また洞窟の外では、太陽を直接見ようとする、輝きに目が眩んでしまうであろう。ともかく、実

際に洞窟の比喩で語られているとおりであるかどうかは、神のみぞ知りたもう事柄であり(517B6-7)、その意味でソクラテスも、先へ進もうと悪戦苦闘を続ける探求者にすぎないのである。

もしも思いなしを抱く点に醜い点、恥ずべき点があるとすれば、それは一つには、それでもって知識に達したとして探求を止めてしまう点——厳密な知識にまで達していないのに、達したかのように思いなす点——、また一つには、自分では何の努力もすることなく、人の思いなしを聞いてそれでよしとする点にあるだろう。後者は、探求の道を進もうと手探りで努力する盲人に道を案内させ、楽をしようとする怠け者に譬えることができる。だからこそソクラテスは、《善とは何か》に関する「今の時点で、ともかく私に思われていること」(506E2-3)を、そのままアデイモントスたちに伝えることはしない。ソクラテスが行なっているのは、むしろ、自分が先に歩み出した「より長い探求の道」に共に乗り出そう、との探求への誘い、呼びかけなのである。そしてそのための探求のプログラムを、目指すべき目標と、そのための方法と、そして探求の過程で遭遇するであろう困難を示す形で、三つの比喩によって説明しているのである⁽¹⁶⁾。

このことはまた次のことも意味する。ソクラテスが「さしあたり、善がそれ自体として何であるかということとはわきへ除けておくことにしよう」(506D8-E1)と言うとき、彼は将来の説明を約束しているわけではない。第一に、先にも述べたように、この言葉は、正義等について用いたやり方で、《善とは何か》をすぐ目の前の短期的な目標として定める、ということとは、止めにしようという意味にすぎない。それにまた、ソクラテスは、友人たちが他人の思いなしに安易に依拠することを容認しないのである。彼が切に望むのは、各人が自らの魂全体を向けかえて、洞窟の険しい道へと踏み出し、善がそれ自体として何であるかを探求していくことである。したがって我々は、《善とは何か》を披瀝するような説明を、『国家』それ自体のなかにも、『国家』以外の対話篇のうちにも求めるべきではない。そしてまた、プラトンを、そのような説明を行なうと約束しながら、その約束を果たしていないと言って非難すべきでもない。プラトンが《善とは何か》の将来の説明を約束したと考えることは、聞く者の魂のなかに知識を入れることができると公言する知恵の教師たちを、自力による探求重視の立場から厳しく批判するソクラテス、またプラトンの姿勢(518B7-C3)とは、ぜったいに相容れないものなのである。

註

- (1) ὁρμή をどう訳すべきかは本論文の一主題でもある。後に論じることになるように、可能性としては‘impulse’ (勢い) と ‘path, course’ (道・方法・方針) とがある。ここではとりあえずギリシア語をそのまま片仮名に移し、「ホルメー」と記しておく。また παροῦσαν をとりあえず「現在の・手許にある」と訳したが、これもギリシア語が両方を許容しうるからである。
- (2) Cf. J. Adam, *The Republic of Plato*, ii, 2nd ed. with an Introduction by D. A. Rees (Cambridge, 1963; first ed. 1902), 55.
- (3) Ibid.
- (4) Ibid.
- (5) (b)と(e)の問題提起については、Adam, *op. cit.*, ii, 55 を参照。またこれらの問題の所在は、次に示す解釈の異なる三つの翻訳からも推察できるであろう (前後も含めて引用しておく)。

[Shorey] let us dismiss for the time being the nature of the good in itself; for to attain to my present surmise of that seems a pitch above the impulse that wings my flight today. But of what seems to be the offspring of the good and most nearly made in its likeness I am willing to speak . . . (P. Shorey, *Plato*, vi, *The Republic* (London and Cambridge, Massachusetts, 1935)).

[Grube] let us for the moment abandon the quest for the nature of the Good itself, for that I think is a larger question than what we started on, which was to ascertain my present opinion about it. I am willing to tell you what appears to be the offspring of the Good and most like it, . . . (G. M. A. Grube, *Plato's Republic* (Indianapolis, 1974)).

[Waterfield] What I suggest, my friends, is that we forget about trying to define goodness itself for the time being. You see, I don't at the moment think that our current impulse is enough to take us to where I'd like to see us go. However, I am prepared to talk about something which seems to me to be the

child of goodness and to bear a very strong resemblance to it (R. Waterfield, *Plato: Republic* (Oxford, 1993).

(2)の部分に関する多くの翻訳の傾向は、大体において Shorey に沿っている(ただし問題(b)については解釈の違いがある) — F. Schleiermacher, *Platon: Sämtliche Werke*, iii, Phaidon, *Politeia* (Hamburg, 1958, originally 1870); B. Jowett, *The Dialogues of Plato*, ii (Oxford, 1871); F. M. Cornford, *The Republic of Plato* (London, 1941); O. Apelt, *Platon: Der Staat, Über das Gerechte*, durchgesehen und mit ausführlicher Literaturübersicht Anmerkungen und Registern versehen von K. Bormann (Hamburg, 1961); A. Bloom, *The Republic of Plato*, (Basic Books, 2nd ed. 1991, originally 1968); É. Chambry, *Platon: Oeuvres complètes*, vii. *Ire partie, La République, Livres IV –VII* (Paris, 1975); 藤澤令夫『国家』(岩波書店, 1976); P. Pachet, *Platon: La République, Du régime politique* (Gallimard, 1993).

- (6) 註(5)に示した Waterfield の翻訳を参照。
- (7) J. Adam, *op. cit.*, ii, 55.
- (8) ところで Adam は次のようにも言う (*op. cit.*, ii, 55) — ‘*ἔασωμεν τὸ νῦν εἶναι* is also in favour of connecting τὰ νῦν with ἐφικέσθαι.’ しかし、「さしあたり (τὸ νῦν εἶναι) . . . わきへ除けておく」理由を(2)のうちに探るなら、それはけっきょく、課題となる事柄が「現在の・手許にあるホルメー」(τὴν παροῦσαν ὁρμήν, E2)の力を超えているという点に求められるであろう。このことは、「今の時点で」(τὰ νῦν)をとくにἐφικέσθαιと結びつけなくても、(2)の「現在の・手許にあるホルメーを越えた大きなことである . . . から」という理由で十分、「さしあたりわきへ除けておく」根拠は与えられていることを意味する。
- (9) すなわち、「. . . 以上に」(ἢ . . . , E2)は, κατὰ τὴν παροῦσαν ὁρμήν だけでなく、ἐφικέσθαι . . . をも支配すると解する。註(5)に示した Grube の翻訳はこの線でなされているように思われる。
- (10) Adam, *op. cit.*, ii, 55.
- (11) Shorey と Waterfield は‘impulse’を用い、Grube は‘start’を用いているが(註(5)を参照)、彼らの訳を比較してみれば、二つの語の意味が同じでないことは明らかであろう。
- (12) ‘thrust’は Bloom, *op. cit.*, 186,によるὁρμήの訳。
- (13) Adam, *op. cit.*, i, 280.

- (14) κατ' ἐκείνην τὴν ὁρμὴν . . . ἦν περ τὸ πρῶτον ὠρμήσαμεν (451C6-7)を、
註 (5) に示した訳者たちは次のように訳す — ‘they follow the path on which we sent them forth’ (Jowett); ‘by keeping to the course on which we started them at the outset’ (Cornford); ‘in their following that path along which we first directed them’ (Bloom); ‘following the road upon which we started them’ (Grube); ‘in the direction we gave them at the outset’ (Waterfield)。
- (15) 435D1 の τοῦτο については、Adam, *op. cit.*, i, 245 に従い、「正義、節制、勇気、知恵のそれぞれが何であるかという問題」と考える。
- (16) 当然ながら、このプログラムの詳細は、三つの比喩のそれぞれを子細に検討するという形で、さらに考察されねばならない。本論文で示したのは、三つの比喩に対する解釈はどのような立場から行なわれねばならないか、という、それ自体一種のプログラムにすぎない。